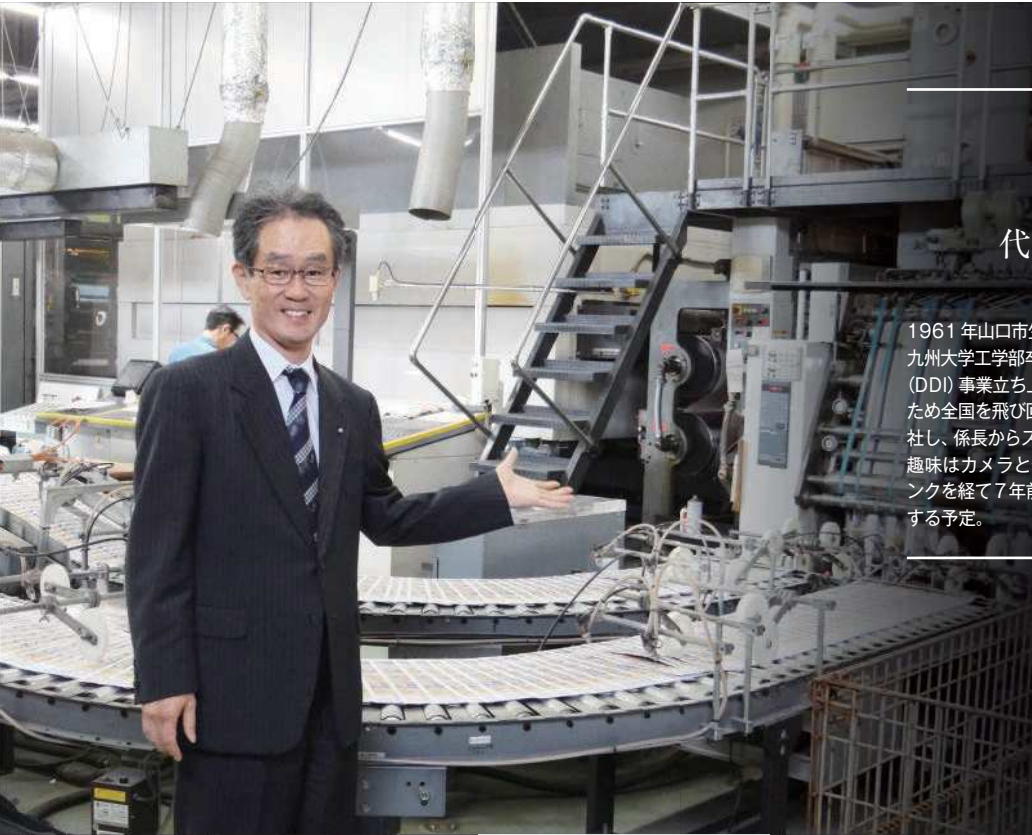


人と人を「紙+印刷技術」 でつなぐ会社でありたい



株式会社マルニ

かわの やすし
代表取締役 **河野 康志**

1961年山口市生まれ。

九州大学工学部卒業後、京セラに入社。稲盛社長(当時)のもと第二電電(DDI)事業立ち上げ時のメンバーとして出向し、長距離電話事業開拓のため全国を飛び回る。28歳の時にDDIを退社し、帰山。(株)マルニに入社し、係長からスタートして2001年、代表取締役に就任、現在に至る。趣味はカメラと合気道。合気道は学生時代に始めて、23年間のプランクを経て7年前から復帰。2段を所有する程の腕前。近々3段を取得する予定。

[企業概要]

(株)マルニ

住 所：山口県山口市道祖町7-13

T E L：083-925-1111

創 立：1943年9月

従業員数：92名

(株)マルニについて教えてください。

印刷とデザインを行っています。最近「つつむ」ことに注目して、パッケージデザインを商品企画から行っています。紙に書くことだけでなく、包装も日本の大切な「心を伝える」文化の1つだと考えています。商品の包装は、その商品の良さを伝え多くの人から「選ばれる」ものを作る必要があります。商品の見せ方、良さの伝え方を最大限引き出すため、企画から携わりたいと考えています。



パッケージ商品の電報台紙

誰かの目を惹くこと、誰かに魅力的だと思ってもらえることは簡単な事ではないと思いますが、それが「デザイン力」であり、アイデア・発想力です。

河野社長ご自身のことを教えてください。

大学進学の時、「もう山口には戻らないだろう」と思いました。技術者を目指して電子工学科に進学し、それは家業には全く関係のない分野でした。卒業後は京セラに就職し、東京で暮らしました。京セラでは当時稲盛社長のもと、DDI事業の立ち上げが行われており、私はDDIに出向(後、転籍)しました。新たな長距離電話事業を手がけるため全国各地を飛び回り、1ヵ月の内3週間は地方に出かけている、という時期もありました。

長距離電話事業が大凡落ち着いてきた28歳の時、DDIを退社し、山口に戻ってきました。

戻ってきて最初に感じたのは、「山口は、なんて早く仕事が終わるんだ」と言うことで

した。当時、東京で仕事をしていた時は、ほぼいつも終電で帰宅していました。終電を逃してタクシーで帰ることもありましたが、これでは給料にも生産性にも差がつくはずだと、都会と田舎の明確な差を感じていました。

しかし、地方ではボランティアや文化活動、地域活動がとても活発です。仕事が早く終われば夕方からの時間をこれらの活動に充てる人が多く、そこが地域の活性化につながる大きな役割の一つになっているのも事実だと思います。こういう所に地方の魅力やゆとりある生活があるのだと思います。

帰山のきっかけはなんだったのでしょうか？

父が体調が悪いと聞いたことがきっかけです。私は次男で、もともと会社を継ぐ気は全くありませんでした。自分が興味のある道を見つけ、工学部に進学しました。「これからは、情報の時代だ!」と意気込んで、技術者を目指し京セラに入社しました。

しかし、兄は医者になり早々に家を出たので、会社を継ぐとしたらサラリーマンをしていた私…ということ。「体調が悪い」と兄や母から聞き、意を決して帰山したものの…。

28歳で帰山した時は、世の中は正にバブル絶頂期で、印刷業界も仕事があふ



インク供給のライン

れ返っている様な状態でした。バブル崩壊後も印刷業界はそれほど大きな影響を受けなかったと思います。

影響が一番大きかったのは、やはり近年のIT化でしょう。バブル崩壊から遅れること10年、2000年代に入って携帯電話とネットの急速な普及に押されて、「紙」の文化は徐々に衰えました。2008年のリーマンショック、そして2011年の東日本大震災がだめ押しとなりました。



高速で動く輪転機

今はもう、これ以上減らないだろうというところまで印刷物は減っていると思います。

「紙」の文化は、和の文化の1つだと考えています。紙に書くこと、も

のを包むこと、箱に至るまで、日本の「紙」の文化は繊細で美しいものです。残すべき大切な文化の1つだと思います。

現在、明治維新150年記念事業実行委員会委員長としてご尽力いただいていますね。

日本が最も大きく動いた時代が「明治維新」であり、そのスタートは山口からでした。それから150年という節目の年を迎える2018年まで、当委員会は様々な事業を展開していこうと考えています。

昨年行った『周布政之助没後150年慰霊祭』、今年9月1日に行った『井上馨公没後100年記念祭』では、地域の方々を含め、多くの方々に会場に足を運んでいただき、盛大に開催することができました。今後も、地域を巻き込んだ様々な事業を行いたいと考えています。

以前から観光には興味を持っていらしたのでしょうか？

観光やまちづくりに興味を持つきっかけになったのは、山口青年会議所で行った『アートふる山口』でした。

山口市は、若年世代の流出が著しい。これでは、若い力はどんどん外へ流れ、地方がダメになってしまうと感じていました。若いうちから、地元の良さを知らしてもらい、例えば市外・

県外に進学したとしても、就職し定住するのは山口市が良いと感じてもらい、きっかけづくりをしたいと思います。大殿・堅小路地域は、昔ながらの街並みを今に残す素晴らしい場所です。また、この地域には「古いもの、おもしろいもの」を持っている人達がいました。この場所で2日間にわたってイベントを開催することで、この「まち」そのものを歩いて楽しんでもらい、その魅力を知ってもらおうというイベントです。

「アートふる山口」では、高校生が案内役になれるよう、地元のお年寄り達から話を聞く機会を設けました。10代の若者達には、親から言われるより、地元のお年寄りから聞く話の方が、素直に心に届き、ふるさとの良さ・素晴らしさを知るきっかけになったと思います。

アートふる山口は、3回目まで青年会議所が主催し、現在では実行委員会が運営しています。10回目からは、「いつでもアートふる」ということで、イベントの2日間だけでなく、市外・県外から訪れるお客様に一年中「アートふる」の魅力を知っていただけるよう、大殿・堅小路地域の方々にご協力をいただいています。10年前、人力車を購入



河野さんの撮影された写真



合気道
(実は投げられている側が河野さん)

していただき、山口市菜香亭や十朋亭などの施設の整備も進んできました。「良いもの」は「観光資源」になるし、それは結果的に経済効果につながります。

「観光」はどんなに景気が悪くなくても、明るい話題、前向きな事業です。山口市ではまだまだ観光のウェイトが小さい。商工会議所事業に携わって、瑠璃光寺五重塔を世界遺産登録しようという活動も行いました。香山公園前観光案内所の設置、駐車場拡大への働きかけも行いました。山口お宝展を開催し、初年度は大変な混雑で地元の方々にご迷惑をおかけした事もありました。

山口市内の観光業がもっと活性化するように、これからも観光関連事業に取り組みたいと考えています。

今後の目標などを教えてください。

「誰かの目を惹くこと」「誰かに魅力的だと感じてもらうこと」が、私のライフワークのようなものです。趣味の写真にしても、私自身が感動して「これは多くの人と感動を共有できる!」というものに出来るよう、常に様々なものに興味を持つようにしています。

「目を惹く」というのは、パッケージデザインにしても、広告印刷にしても、観光にしても、全てのものに通じます。そのものが持つ「最大限の魅力」を伝えられるよう、常にアンテナを張っていたいと考えています。

また、なんとと言っても「健康第一」です。これは私だけでなく、社員全員に対してもそうですが、元気でなければ、仕事も家庭も暗くなる。良いものを作るためには、自分が心身共に健康であることが第一です。

旬の物を食べ、健康管理をしながら、これからも山口市の魅力発信に貢献していきたいと考えています。



「井上馨公没後100年記念祭」で挨拶